



至福のワインづくり



ベランダの外にはブドウ畑



ブドウのときは？ 田村さん



斜面のブドウ畑に立つ向井さん



ワインを楽しんで

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、高齢年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

農村部における過疎、高齢化進行の一方で、高齢年齢層の都市部から農村部への還流が新たな動きとして着目されています。開放的な北海道の農山漁村はその豊かな自然環境と比較的整った生活基盤とあいまって、移住希望の多い地域となっています。本シリーズでは、北海道を事例として、移住・長期滞在・二地域居住の地域社会に与える影響と今後の方向性を探ります。

農山漁村の二地域居住をどう思うかを田村さんに聞いた。「都会生活がつかないから都会を捨てて農村に行くということではなく、都会の魅力や生活をマスターして都会の感性を農村に持ち込むことが重要である。それを農村生活に活かすことができる。二都物語ですよ。」

農村でブドウづくり・ワインづくりという未知なる世界に挑み続けている都会人、田村さん。その尽きない好奇心、そして深く終わりのないテーマに挑戦する田村さんの姿勢はとてつもないトでエレガントに見えた。

菜根荘の日々

田村さんがワインづくりに余念のない盤渓峠から広大な石狩平野を挟んだ反対側に、千歳市、由仁町、長沼町、栗山町、若見沢市にまたがる海拔250m程度の低い丘が連なっている。これがマオイ丘陵である。その長沼町域の一角丘の中腹西斜面の4千坪の敷地に「菜根荘」が建っている。菜根荘の主である向井隆さん(69

都市生活者が望む田舎暮らしの目的の一つに農業がある。しかし、一口に農業といっても、北海道らしく何十町歩もの畑を大型トラクターで耕す本格的なものから家庭菜園程度のもので千差万別である。こうした農業の中でも、すでに田舎生活を楽しまれている田舎暮らしのブローチの一部が最近ではまっているのが、自らの畑でブドウを育て、自家製ワインを製造するといったものである。今回は、札幌近郊でこうした取り組みを行っている二人の都会人たち取材した。

盤渓峠のワイン

札幌市中央区盤渓は、札幌の中心部から車で20分ほどの都会の山村である。30年前に市民向けのスキー場ができてから、市民の憩いの場となり、唯一の小学校は札幌市内でありながら、早くから山村留学の受け入れ校になっていた。このような都市近郊農村である盤渓と札幌市街地の境界部分、盤渓峠にそのワイン工房はある。工房の主は田村修二さん(66歳)。東京生まれ、東京育ちの田村さんは、大学卒業後通商産業省(現経済産業省)に入省。スタンフォード大学院(現経済産業省)に入学。スタンフォード大学院への留学を経て国際社会で活躍。1983年に札幌通産局(現北海道経済産業局)商工部長として赴任。このことが、田村さんのその後を人生を変えたようだ。盤渓に畑を借りて、野菜づくり、炭づくりなどを始め、子育てのためには札幌にマンションを購入。東京に戻っても、休日は札幌という生活が退官まで続く。その後(社)海外コンサルティング企業協会で東京を中心に海外を忙しく飛び回る生活に入っても、心の拠点は札幌にあり、札幌のITベンチャーやバイオ企業などを応援。また、'96年から北海道大学客員教授として先端的な産学学究の拠点である産業クラスターや北キャンパスの立ち上げにも尽力する。

農業分野で職人を育てる

田村さんのワインづくりは、深い問題意識から生まれた。当初、田村さんも、わが国産業の国際競争力強化のために都会を整備し、雇用を創出していくという視点で国内を見ていた。その後のスタンフォードでの滞在経験から日本の産業形態を見ると、縦型の業種組織はあるが、個々に独立した企業形態が少ないし育ちにくいことに気づいた。大学で「ベンチャー」や「インキュベーション」について説いてみても、行動を起す人があまりにも少ないのだ。また、都市以外の地域を見渡すと、最も悲惨な状態になっていた。特に北海道の農村・農業を何とかしなきゃと危機意識を持った。

北海道の農業は原料生産が中心である。規模が大きければそれなりの収入は得られるが、農産物の質に対する意欲は育ちにくい。原料生産のみならず、加工という迂回生産を経てはじめて農業の楽しみが生まれる。しかし、迂回生産といっても、食品の場合、味噌や醤油にしてもそう簡単なことではない。職人としてのノウハウや技能が必要となる。田村さんは、努力しなければ結果は生まれないというリアリズムの世界を実践して初めて相手や団体とのリスペクト(尊敬、尊重)のある関係や「コミュニティ」が生まれるという。この言葉の中には、「職人になること」がその解決方法のひとつであることが含まれている。

都会の感性を農村生活に活かす二都物語

現在、盤渓峠にある田村さんの農地は約三千坪。住宅の隣にある建物は食品加工研究室としての機能を維持し、畑ではブドウを育てている。この畑から1トンの収穫があり、5百リットルのワインが生まれる。さらに、農家からブドウも購入している。品種はキャンベル、ポートルの高級品種、メルローは成長を止めている。しかし、カマイ・ソービニオンはよく育つ。立派な枝振りでも一番元気の良い木だ。この木に最良の実をつけさせるためには、どのようなせん定をすればよいか、試行錯誤が続いている。北海道のテロワール(気候、地形、地質などの複合的地域性)に最も適したワイン用のブドウ種とその栽培方法探しというとても面白い試みに立ち向かっているのだ。ちなみに、前述した田村さんにカマイ・ソービニオンを株分けしてあげたのは向井さんである。

つらい農作業の「褒美」

「農業は力仕事です。都会に住まいを持っているのは、いつか仕事ができなくなるかわからない。そのときにひとの世話にならないような保険です。マンションは便利ですから」と向井さんはいうが、そのエネルギーに満ちた精神とブドウづくりへの情熱、しっかりとした体格からは栽培を始めてまもない若いブドウたちが最も力強いワインを生み出す樹齢30〜40年木を迎えるまで、その日は訪れないように思える。

最後に、向井さんにとっての農業とは何かと聞く。「苦しみですよ。大変ですよ。決して楽しくはないね。でも、あとから楽しい。そのお返しにこつこつ飲み物があつたりする。それを介して、友達と会話できる豊かな時間が生まれる。それが「褒美なんです」。植物を愛し、人との出会いを大切に、笑顔絶やさずに、夢中になれるテーマを追求している。やさしさを体中から発散し、畑に立つ向井さんの姿は、美しいマオイの丘の風景にとても自然に融けこんでいた。

レポーター

小俣 寛

(財)北海道地域総合開発機構主任研究員